

領域を担う人々

——島崎光正論

腰原哲朗

はじめに

現代詩がとりもつ縁で、国立身体障害者リハビリテーションセンター聖書のつどい発行の「せせらぎ」（二〇〇〇年九月二一日）がとどいた。それに島崎光正「私にとっての松商学園」が載っている。その一節をひく。「この夏はまた、春先以来続いている松商学園高校の放送部の生徒との出会いのあったことも画期的な出来事だった。この学園は戦後男女共学となっていた。片丘の私共の住ま居までこの部活の皆さんが取材にやってきて、特に若い女子のメンバーが隣にすわってマイクを向けられた時には、しばしスーツを着た龍宮の乙姫たちに囲まれた感じがした。間もなく、私と妻は招かれて薄川ぞいの校舎にも出かけていった。そして、玄関をあがると、直ちに放送部の男子の生徒たちが車椅子のあとを押してくれ、奥へと案内してくれた。それは、新校舎の成る日を目前にしながらも思いを残し学園を去っていったから、半世紀をはるかに越え、今その校舎に初めて入り廊下を行った出来事だった。」

領域を担う人々

この文章を発表して数ヶ月後の晩秋に急逝するのだから、絶筆といえる一節かと思われるので引いた。放送部の制作「喜びのいのち」は、この年の第47回NHK杯全国高校放送コンテストで優秀賞を受賞した。島崎光正家は塩尻市片丘にある。元禄時代建立の本棟造といわれ重要文化財に指定されている。

この家に、生まれて間もなくやって来て祖母すず^ずに育てられた。福岡市で生誕したのだったが、父光頼は九州大学を卒業して九大医局勤務だったがチフスの感染で急死、戦前の家父長制度のもと、長男ということで信州へ連れてこられた。母早苗は惜別の情に耐えかねて九大病院の精神科に入院し、そこで生涯を閉じる。したがって、島崎光正は両親に接したのは生後一ヶ月ほどで天涯孤独の身となった。加えて先天性の二分脊椎^{にがんせきつい}（脊椎披裂症）で身体障害の身で生きぬくことになる。

松商学園（松本商業学校）に入学したのは一九三三年（昭八）学校のすぐ近くに転居して通う。先に引用した一節と同じ「私にとっての松商学園」（『私の旅路』収）で次のようにいう。「日本でもちようど軍国主義が跋扈^{はつこ}をはじめようとしていた時期。足を引いていた私は、軍事教練がかなわぬことから公立の中学校には仲なか進みがたかった。その点、松本商業学校は私立ゆえの多少の幅があったらしく、上級生にも足にハンディを負った生徒がいた。」

公立教育にはみられない、私学教育の面目、存在価値を示す事象である。その後、人生の糧となる文学と信仰の道へ進み活躍する。晩年には福祉問題にも発言を強めた。こうした人生は社会教育の側面などからも注目され、マスコミにもとりあげられた。ここでは文学と福祉の面から考察を試みる。

なお戸籍は嶋崎であるが、著書にあわせ島崎に統一する。

文学の領域

島崎光正の文学的出発は、松商学園を中退した一九三五年（昭一〇）短歌に親しみ、ドストエフスキーなどを読みはじめた時である。やがて詩作をはじめた四〇年（昭一五）同人誌「桑の実」を創刊、「弦」の筆名で詩を発表する。そのころは宝文館が出していた姉妹誌「令女界」や「若草」といった竹久夢二表紙絵のジュニア雑誌に接していたが、一方でフランス・ジャムの詩にもひかれる、いわば一般的な文学愛好青年であった。

当時の信州には、夢二にひきこまれた浅間温泉の詩人高橋玄一郎や「令女界」の編集で出京した上田中学出身の詩人柴山晴美や、ジャムに感化をうけた軽井沢で療養のカトリック詩人野村英夫など活躍中の人々が多数いた。こうした人々にくらべれば、文学的成熟度において、かなり遅れた出発で、四季派の抒情詩にとどまっていた。

発表の舞台となった同人誌「桑の実」は10号までは謄写印刷だった。それが信毎学生部長の今井博人の尽力もあって、印刷所が信濃毎日新聞社となり、活版印刷となった。私の手元にある最終号12輯は、「桑」文芸同人誌、発行兼編輯人島崎光正（昭和一六年一月三日発行）となっている。評論、小説、詩を中心とする七〇ページの立派な雑誌である。そこに発表されている詩「水系」が「水の系譜」と改題されて、戦後に出版された処女詩集『故園』の冒頭に収められているから、深い思いの作品ということであろう。次のような作品である。

水系

おほばこ
車前草の根元を洗ふわづかな流れであつた

領域を担う人々

領域を担う人々

ほんたうに わづかな流れゆゑ

そらの浮雲や

自転車のスポークなぞ

映ることもなく

ただ ちろろめき

毎日のならひであつた

夕焼けがした

からから鳴り澄む矢車の季節があつた

しかし

杳とほいものごゑに聞きすごし

素麵さうめんよりもなほ細く

くねくねと

流れてゐた

——けれども

この系図の先を

陶器のかけらなぞきよらに沈め

小川となつてをりはしないであらうか

櫛のやうに 鉄橋が掛つてをりはしないであらうか

日々

ささやかな流れであつた

葉や種子を薬用にするオオバコは農道にもいっぱいあつた時代である。小学生たちはその車前草を洗い乾してたくさん学校へ持っていった。私は量が少なくて恥かしかつたから記憶に鮮明だ。作者もまた不自由な体で薬草を摘み、小川で洗っている。そのころの川は飲料水としてそのまま使っていたから澄みきっていたはずだが、根元の泥が水面をくゆらすたびに、背後を行きすぎる自転車の影が消える。いや、浮雲さえ映らないほどの小さな流れ、安全な川でしか少年は洗うことができない。まして身障者では自転車にのることができない。もつと普通に歩行が可能なら、夕焼けを背に食器を洗う人々や、鉄橋があるはずの風景に接することができるのに。

作者はしかし杳い声に耳をすまし、大自然と運命の系図に身をゆだねるのである。若いのに諦念のような心象風景を素描する。しかし座して静かに風景にひたってはいられない。動いて生活しなければならぬ。作者が、たびたび引く次の「ふうきん」という作品では、苦渋の心理を、屈折した自虐的になりやすい心情を秘めながらも、それを止揚し、美しく言葉に定着しようとする意志が示される。

ふうきん

汗をかいて訪ねてくれた友達と

領域を担う人々

たくさん話を交すため

足の立たないわたくしは

這ひずりながら先へ立つ

わたくしの部屋はあちらです……

畳を這へば

さらさら音の立つのだが

嬉しい日の音楽でなくて何であらう

わたくしは膝で風琴を鳴らし

ともだちの前をせつせと這つてゆく

黒光りする旧家の畳の上を、和服の衣ずれの音をつれて移動するけなげな少年には、友人が訪れたことの喜びでいっぱい。しかし歩けないから這つていくその音は、まるで風琴のようだというのである。柴山晴美が旅芸人の弾くアコーディオンを追憶する甘酸っぱい詩「手風琴の唄」（『処女地の雪』収）とも、義父が行商して歩く姿を描いた林芙美子の「風琴と魚の町」ともちがう、自己の厳しい存在感をあらわしている。

祖父の富左衛門と祖母すずは、孫の友人たちを手厚く迎えたことであろう。なにしろ孫の光正の成績は、小学校時代は体操を除けば五段階ですべてオール甲、松本商業学校時代も一五〇人中で席次は二番という優秀生だったのだから。十歳以上も先輩になるが、幼くして母を亡くし松本中学を中退して詩で頭角をあらわした浅間温泉の高橋玄一郎や、松商から

青山学院へ進み、穂高町で演劇やダダイズムの雑誌を手がけた清沢清志なども、時として訪れたかもしれない。やがてこの三人、島崎光正、高橋玄一郎、清沢清志は文化活動故に、開戦の翌朝一二月九日、治安維持法違反で検挙される悲運にあう。戦後この三人が地域文化を担う姿は『信州詩壇回顧』（柳沢さつき編）の鼎談からもうかがえる。

その間「桑の実」雑誌を出す謄写刷りの自宅工房を「ゆり香社」と名づけて友人の歌集を手がけることにもなるが、仕事の中心は白樺人形を刻むことであつた。白樺は材質も柔らかいので、小鳥などを木彫で仕あげ、浅間温泉へ土産物として出した。数点の作が残っているが、愛らしく器用に彫っている。

長野刑務所からは起訴猶予で翌昭和一七年五月出所するが、思想犯保護観察下におかれたから、文学活動は冬眠となつた。政治弾圧による留置は、人間不信、社会不信を当然のこと増長させた。接触のあつた警察官が態度を一変してあらわれたのだし、とりたててマルクス主義を標ぼうしたのではないのに、冬コンクリートの空間に身障者を国家は投げだしたのだから。この辺の情況は自伝『星の宿り』（筑摩書房）にくわしい。「留置場に入れられて、いく日も夜空というものに接しなかつた私にとって、それは捕囚の底から仰いだ、全く驚異に値する星の宿りの姿だつた。恐怖すらいつか薄れた感じの、くの坊と化した私の心にも、何ものが目覚めるかのようにだつた。私はそのまま刑事を待たせ、杖に身を寄せたなり、なおしばらくそこに立ちつくしていた。」こうして五カ月近く収容されたのち自宅へもどつたが、二〇年一月には祖父逝去、祖母も翌年没して、戦後は、農地解放で地主の位置も失ないキビシイ旅発ちとなつた。

戦後の出発

戦後は謄写版冊子の詩集「祖母」からはじまる。祖母の新盆を前にして二一年夏に編んだもので、表紙には「異色 色

即是空」とある。島崎弦の筆名で12篇を収める。筆耕は松商時代の同級生で親しかった酒井幸男、同じく親友の石曾根良忠が一文をよせている。「和尚の傍に正座した弦が時々啜り上げて肩を震はせる後姿を見ると泣けてしまった。」云々。祖母との暮らしを追悼したこれらの作品は、大部分そのまま、『故園』に収録している。「祖母は、私にたべられては困ると思ひ、近所からいただいた水蜜桃を何処かにかくした」などといったユーモラスなものや、耳の遠くなった祖母と、障子を閉し、遠い野に鳴く虫の音を聞いている、といった素朴な短詩をふくむが、ようするに「祖母に献ず」という冊子である。

こうして出発は近親者を失なつた悲嘆から、母や祖母への思慕が表現の源泉になつていく。その点、投獄という不条理や、農地喪失といった社会変動を経験したにかかわらず、それが直接に作品にはねかえらずに『故園』が生まれたことは、私にとっては驚きである。驚きというのは、私がそれだけ恵まれた状況にいたというだけの話であつて、島崎光正青年にとっては、視線が社会批判へむかう余地がないほど世界は悲の器だつた。森田進が解説するように「作品にあふれる母恋いの深さとせつなさは、悲しく美しい。」（『長野県文学全集』詩歌編 郷土出版社）「実人生の棘の中から歌うある種の人生派詩人」（恵泉女学園短期大学「研究紀要」18号）として出発しなければならないほど、それほど真に孤独だつたと解さねばならないだろう。

青春期の男の感性は弱いものだ。幼少期に母と離れたために、恋慕が作品の原点になつている文学者は多い。思慕が母の病死、発狂、自殺などの事情によつて反逆に転じたり、デカダンスに陥つたりする。藤森成吉、檀一雄らを想起するまでもなく、幼くして母から離れた漱石、鷗外、藤村などにしても、表現衝動の底流には追慕が隠れているのではないか。それはともかくとして、追憶は作品を古風にしがちである。『故園』の序文で三好達治は「ここに見る詩はなるほど古風

です。」と記したが、養子にでた三好達治もまた母へのコンプレックスゆえか、古風な詩を書いた。三好達治との接点は、島崎光正の母早苗の弟が田中千禾夫ちかおであつたから田中澄江の配慮によるものである。同じ序文でも三好達治が谷川俊太郎『二十億光年の孤獨』で「風にもゆらぐ孤獨をささへて 誇りかにつつましく 折から彼はやってきた」と記したのとは、かなりちがっていた。島崎光正の孤獨にくらべて谷川俊太郎は哲学者の父徹三を背景にした観念的な孤獨だつたし、農村の素朴な人生詩に対し、巧みな技法を駆使した都会派が谷川俊太郎だつたから。つまり詩史の上では、あるいは詩ジャーナリズムの上では、両者はまったく対照的な航跡をたどることになる。言い換えれば島崎光正の詩は終生さして変化することがなかつたし、またその必要もなかつたということである。実人生と作品世界は一体化し、いわば徹底した私小説的な私詩として晩年までつづくことになる。このことはしかしある意味で幸せなことである。詩をめぐる定型の問題や、文学と政治の関係をめぐる論争などに煩わされることなく、自己表現に徹することができるからである。

とはいへ、文学史に無関心だつたり、作品に何の変化もなかつたというわけではむろんない。だいいち実生活面で、昭和二三年に松本日本基督教会で洗礼、『故園』出版後の三四年には出京し足関節の手術、三九年には結婚、平成四年に帰郷するまで東京での生活がつづく。したがってキリスト教信仰と三十年以上の在京は、作品に多少の変化をもたらした。在京中に出した詩集は『冬の旅』、第三詩集『分水嶺』、第四詩集『柊の花』である。これらの作品のほとんどはキリスト教関係の雑誌に発表されたもの、一部ふつうの同人誌に載つた作もあるが発表の舞台は限られていた。詩集のほかにも、いくつかの人生論といえるエッセイ集、身障者の詩華集など多くをかぞえるが、大部分が基督教関係の出版社からのものである。出版という点では恵まれた状況にあつた。けれども、それだけにキリスト教の色彩を濃くしていく。そうした傾きを示していく起点が『冬の旅』である。

信仰の領域

詩文集『冬の旅』（一九六四・八・三一 未来社）扉には砧伝道所付近にて杖一本で背広姿で立つ著者近影がある。正面をみる意欲的な表情で立つ。詩文集は四部構成で四七篇、安西均の跋と『故園』以後という作者の来歴を語るエッセイを収める。

しかしこの詩文集は、続く『故園・冬の旅抄』（一九七〇・一一・一および二〇〇〇・七・二五 日本基督教団出版局五版発行）では、抄とはいえ三一篇をはぶき一六篇だけを収める。さらに作品の数カ所に修正を加えている点からみて、不本意な詩文集だったとみられる。はぶかれた詩の一つに「起点 再渡仏の森有正先生を送る」がある。

万里の波濤をこえ 大空をこえて あなたは再びマロニエの花咲く外国とくにに戻ろうとする 一九五五年初冬 ふるえる日本の季節の中から とぼしい我等の群の中から あなたがつばさを起す 二階の古びた畳の上で両手をつき、僕らは別れをつげる 障子に影さすもみじの散つたさくらの枝 その梢の向うに あなたの外套が見えなくなる 帽子が見えなくなる 額の鉢床が遠ざかる そしてあなたと僕らは一つになる 夜なよな山巔をまたぐ星座の花園 そのむらがりよりもつと高い いつも真昼の空の中で 同じリボンでむすばれる蝶の瘤 その若い紅絹もみ

松本教会で作者は矢内原忠雄らと接したから、森有正への惜別の情が増したのであろう。この種の情を形象化するのにはむつかしいものだ。だから次の詩「麦秋 哀悼 小塩力先生」も次のように修正している。（ ）の語句が修正したところ。

満目緑の中に 彼の丘の一角が 黄金いろに色づこうとする 色紙型の一アール しずかにこぼれる季節（暦）の砂

時計の中で 早くも（季節の）終りの旅支度を整える そのよろこびと悲しみ ほととぎすが挽歌をくりかえす 天が瑪瑙の涙をしたたらす

母や祖母への恋恋とした恋着は、対象をひろげていく。年齢的にも当然のこと、人間関係は広がっていくが、必然的に信者や身障者のつながりが深まり、したがって詩作品の世界も限定されていく。それだけに、私のような宗教に疎い無知な者にとっては、どの詩集もみな同じに感じられる。しかし細かにみれば、たとえば森田進解説のようになるのである。すなわち第三詩集『分水嶺』は「光正の抒情詩がいつそこの安定を見せて、キリスト教が抒情の中に溶け込み、そこから喜ばしき訪れとしての福音が息吹き出している。八木重吉は自然をうたう詩と信仰詩とに分岐しがちであったが、光正の場合には渾然一体化した宗教的抒情詩を創りあげつつある。」（森田進 前出「研究紀要」第18号。『悲しみ多き日にこそ』収）

昨今の現代詩の世界では、キリスト教詩人の活躍がめざましい。しかしそれゆえに、つづく森田進の指摘は鋭くを得ている。これは宗教詩にかぎらず、文学全体の問題にも通じているので、すこし長いが引用させていただく。第四詩集『柘の花』について言う。「この詩集は、いつそこの宗教的色彩が強まっている。信仰を通して獲得され、神学的意味を付与されて発酵する抒情が息づいている。完成期を迎えたのである。ただし完成期であればこそ迫り出してくる重大な課題がある。すなわち、日本のキリスト教詩人の詩が、今、誰を讀者として射程に入れて普遍性を獲得すべきなのか。あるいは未表現の信仰的な深さを追い求めて、キリスト教界以外の世界に対する孤立を覚悟で深化させていくべきなのか。この二つの道は一つである。」光正自身もまた道の一つにするために葛藤し、つとめて努力したであろう。しかしさして深刻ではなかったと私にはみえる。しかし、そのことが逆説的に成功につながっている例がある。『分水嶺』収の「臍」^{へそ}という作

品で、森田進も高く評価する。「おふくろの記念碑」であるヘソは「おれの地球のまん中で 天をにらんでいる」「太陽の方向にむかって 弓なりの軌跡は ベトナムの空に涙するがよい」とうたう長詩である。私おれと社会との接点をもつユーモラスな佳作である。しかし、こうした作は少なく、次の詩集でも神アガペーの愛が中心をなしていく。

第四詩集『柊の花』にも長詩「方南町の靴屋にて」がある。身障者用の靴を作る店頭で、作業台に子供の靴をみかける。その姿にむかって「おお幼い友達よ 歩いていけ 歩いていけ 君たちこそリュックに知恵の花を負い 真珠の涙と 黎明を知っている この世の旗手なのだ」と結ぶ、見知らぬ身障者の子供に対してはげます朗読詩である。連帯感をにじませた生命に根ざす、わかりやすい作品である。

田中千禾夫「跋」でいうように、以上の詩集から、人為人工の都会ではない信州の自然との触れあいから磨かれた感受性、第二に「濃厚な亡き母への清冽な慕情」、第三に「芸術と宗教との矛盾の如きを少しも感じさせない」といった特色が浮上する。詩史の上からみれば、こうした古風な領域に身をおき、信仰に支えられつつ、身障者の人々にむけて、生きる喜びを発信しつづけた。現在『島崎光正遺稿詩集 帰郷』が編まれているようである。次に宗教の聖地へ帰郷した作を収める最後の詩集『風のしおり』をみて結びとする。宗教が民族紛争につながり、世界史を混乱させる風景を詩人はどうみたであろうか。

『風のしおり』（一九九二・一一・一〇 日本基督教団出版局）は第五詩集となる。一九八九年の春ギリシア、イスラエルを一五日間旅した時の作品が収められている。旅情を表現することは平凡になりやすくむつかしい。その中から「国境」をひく。

紅い芥子けしの花の群れに沿う

砂漠の道の片側は

有刺鉄線の杭が

長々と続いている

暑い太陽に晒され

断絶の意思が

地殻を鈍のように引裂いている

福祉の領域

身障者を軸とする福祉の問題を集録したものに、島崎光正『からたちの小さな刺』（一九七九刊 日本基督教団出版局）がある。「この一冊は、私の社会福祉論である」というように、講演やエッセイを収める。かたい論文ではない、体験から発言する福祉観である。

瀬戸内海のハンセン病棟、長島愛生園を一九六二年（昭三七）見舞ったのにつづいて、東村山市の全生園について次のように記す。戦後のプロミンに代表される特效薬は回復を早め、社会復帰が相つき外出も自由になったけれど「私にはなお園のまわりには、厚い柵の垣根がめぐらされているイメージを持つ。それは、こうした場所に対してのなお根強い一般社会の偏見であり、人々の心の中に抱いているとげであり、垣根である。」とみる。じつに人の心理心情はやっかいなもので、同和問題とともに論理をこえた死の棘がひそむ。そこを解決しなければならぬ。ハンセン問題に対し国側が謝罪したのはつい先日のことだが、経済面とともに意識面に配慮しなければならぬ。「社会福祉という言葉が、歯みがきのよ

うに日常ふんだんに使われる時代となりましたが、その内容が、とかく高さより低きに手をのばす一方的なものになりがち」と訴える。が、訴えるだけでなく続けて心身障害者の側からも「世に献^{アクトイブ}げてゆく積極な方向がなくてはなりません」という。

この「世に献^{アクトイブ}げてゆく」という言い方には、たぶん創造主なる神の前に平等である人間存在として、自己解放をめざすべきだという気持がはたらいっているようである。ここから恥辱についての発言「障害を恥じる気風」について警告する。羞^{アクトイブ}じは生理的、感覚的に誰でもある「人間に共通した感情」で自然である。(昨今はこうした美德、美意識もうすれてきたけれども)。それに反して恥じるは「内面的、人格にかかわる」意識であるとし、障害を恥じる風土を批判する。

こうした精神風土への見直しの直視は、シルバースートの奇妙な現象や、「地域のイメージダウンの名において、社会施設の新設に対する反対運動」といった社会事象におよび、特殊化して対象を疎外しないことを求める。

巻末には、水上勉との対談が収められている。島崎光正と同じ障害をもつ娘さんについて「水上直子の存在が立身出世主義にブレイキをかけ、足元を見ろと自戒の念をおこさせる宝」と水上勉は言い、二度めの対談を収める「傷める葦を折ることなく」(一九八一刊 新教出版社)では、仏教説話などにみられる盲者を差別するような仏教の不浄観にも言及する。

島崎光正の詩にたいしては、松葉杖でゆっくり歩くから「足もとの何げない景色にも尊いものを見る敏感な感性」がはたらき、共生することの意味が示され、健康的で自信をつけてくれる、と評価している。そうした共感から水上勉「くるま椅子の歌」「坊の岬物語」には、光正作品「杖」や「早苗といふは」が引用されることになった。

そのほか、出生前診断をめぐるの、法医学の木村利人との対談がある。バイオエシックス(生命倫理)を中心とした

生命の尊厳については『喜びのいのち』（二〇〇〇刊 新教出版社）および『低きにくだりたもうて』（一九九六 同社）に収める。遺伝学の進展や、ベトナムでのアメリカ軍の枯葉作戦による障害児発生で研究が進み、胎児のうちから診断が可能となった。そうした状況のなかで、障害児を産まないということも選択肢の一つとして許されるのか、といった問題についての対談である。結論は自明である。障害の身でも「喜びのいのち」を全開できた詩人光正であったから。

誰しも生あるかぎり、いつどうなるか不明である。ハシカ熱で盲目になってしまった詩人エロシエンコ、駐日大使だったライシャワの妹で聴力を失った例、また大江健三郎の子息の例などかぞえきれない。そうした身近な人として、最後に私の親友の場合を記して自戒としたい。

テレビのアニメーションで放映がつづいたムーミンの脚本を担当した一人、吉田喜昭のことである。彼は小児麻痺のため歩行が不自由で、そのためシナリオライターになり童話も書いた。私と一緒に美しい詩集も出した。大都会でマンションを自力で購入し二人の男児を育てた。その場所が、先に引いた方南町で、私は出京のたびに七度ほどその部屋を訪れた。「方南町の靴屋にて」という詩が印象ふかいのもそのためである。今年の大雪の夕暮れ、ふっと気になって電話をした。三畳のベッドから動く心配がして、短期大学の非常講師をしていたからレポートを気にしているとか、二人の男の子にさえ気をつかうとか、多少ながい会話になった。部屋を這う身だから入院したいとも言った。その夜、彼は急逝した――。

ハンセン病の例が示すように、福祉は時間的に急がねばならない。最後に生活をともにし活躍を支えた島崎光正夫と、吉田喜昭故夫人の愛情と尽力に敬意を表して結びとしたい。

(付記)

ゼミで「喜びのいのち」(松商学園高校放送部 金井貞徳顧問製作)を聞いた感想の一部を付記したい。

「母は島崎さんをすごく愛していたと思う。私もそのくらい愛してあげたいと思う。今はおなかにいる時、障害をもっているかわかるが、もっていたとしても生んで育てていきたいと思う。」(商学科二年 金子侑加)

「島崎さんは私が生まれた片丘出身です。この小学校の校歌の詞を書いたのが島崎光正さんでした。体が不自由で、父母との思い出もない島崎さんの詞は時に悲しく、美しく、すばらしいと感じます。私の好きな詞は『手をつなぐ笑顔と笑顔』校歌の一部なのですが、私にとって笑顔というものは、人と人が接する中で一番大切なものだと思うので、とても好きです」(同 安藤奈美)

最近の参考資料として目にふれたものは次のとおりである。

島崎光正 車いすの詩人「信州自由人」(創刊第2号 須田治)

悲しみ多き日にこそ 詩人島崎光正が遺したもの(SBCテレビ 平13・2・1)

追悼文「みすず野」(市民タイムス 中野幹久 12・11・24)

生きる意志 抒情に昇華(同 腰原哲朗 11・29)

「嶺」14号 「島崎光正小論」(永野昌三 13・4・10)

「日本現代詩人会報」82号 いのちの讃歌(諸隈道範 13・4・18)

なお、島崎光正著作物などは、ミッションスクールに保管されるようである。